経営学部キャリアガイダンス実施教員に関するアンケート結果のとりまとめ

経営学部キャリア委員　夏目　重美

1.　キャリアデザインガイド１の内容と感想について

（1）キャリアデザインガイド１の内容と感想に関して、次の諸点において高い評価を得た。

① キャリア論の知見にのっとり、豊富で充実している。
② 学生の興味を引き出しやすく配慮されている。
③ 学生が主体的に取り組むことができる。

（2）キャリアデザインガイド１の内容と感想に関して、次の諸点における今後の課題を指摘された。

① 学年によっては量的に多すぎ、説明時間も足りない。
② 目次に関してさらに体系的整理を要する。
③ 適宜ゼミナールや授業に織り込むなど、学生の活用を促進する制度的仕組みを検討すべきである。

2.　キャリアデザインガイド１の活用状況について

回答教員の 30 パーセントは活用していると応え、20 パーセントの教員は活用していないと応えているが、残り 50 パーセントの教員は今後活用したいと回答した。なお、活用の場面と今後の活用場面に関しては、次のとおりである。

（1）活用の場面

① オリエンテーションゼミナール、基礎ゼミナール、ゼミナールⅠ、ホスピタリティー演習等の授業時間にキャリアセンター職員を招聘し、解説とワークを実施、活用した。
② 一部の教員は、独自に説明とワークを実施、活用した。

（2）今後の活用

各種ゼミナールの他、「人生と進路選択」においても活用したい。

3.　本学のキャリア教育に関する理解度について

回答教員の 10 パーセントは、良く理解していると回答し、80 パーセントは、概ね理解していると回答したが、残りの 10 パーセントは、理解できていないと回答した。教員の専門領域や過去の体験領域の相違、学内における周知度合いの相違等によって、理解度に若干の差異があった。

4.　本学のキャリア教育に関する今後の具体的課題について

（1）キャリア教育の基本的課題

① 学生自身のキャリア意識を覚醒させる。
② 卒業後の危機感（絶望感でなく）を認識させ、危機克服のための学業修得の重要性を自覚させる。
③ 働くことの意味を自覚させる。
④ 社会における自己の有用性を認識させ自信を回復させる。
⑤ 可能な限り、大学外の状況を認知させる。

（2）キャリア教育の具体的課題

① インターンシップを強化する。
② ゼミナール等グループ単位でキャリア教育を実施する。
③ 留学生のキャリア支援を積極化する。
④ 生涯学習課講座授業を再検討する。
⑤ 正規科目内においてキャリア教育を浸透させる。
⑥ 成功体験の講演会や講話会を増やし、聴講内容をオリエンテーションゼミナール等でレポート課題とし、評価点に算入する。

5. 「教職員一体」でキャリア教育に取り組むに際し、「教員」と「職員」の役割分担に関するアイディアや具体的方法について

(1) 教員と職員との密接な意見交流の場を設ける。
(2) 職員側の認知している情報を教員側が共有する機会を増やす。
(3) 教職員から何かを与えるという発想でなく、学生の主体的取り組みを教職員がサポートするという仕組みを構築する。
(4) 学生の主体的取り組みから抽出された悩みや課題の解決方策つき、教職員が協力して取り組む。
(5) 企業見学等の実施にあたり、職員が実施計画を作成し、教員が事前・事後研修を実施する。
(6) キャリアデザインガイドの活用につき、次の手順に従う。
  ① キャリアデザインガイドの手順のみを記載した書き込み式の冊子を作成する。
  ② 学生個人が冊子上のチャートを手順に従って記入し、グループ内で発表し合う。
  ③ タイムスケジュールを作成し、一定期間ごとに実践した成果を提出する。
  ④ 提出された各自の実践成果をグループ内で発表して相互評価する。
  ⑤ 要員が不足し、専任教職員の配置が困難である場合、専任教職員のマネジメントの下、非常勤講師を配置する。

6. キャリガイダンスに参加しての印象や感想について

(1) 職員担当者の豊富な経験と熱意に好感を得た。
(2) 学生にとって有益な学習機会である。
(3) 早期（１・２年次生）のキャリアガイダンスの重要性を再認識した。
(4) 学生のキャリア意識高揚を目指し、教職員一体となった努力を傾注する必要性を痛感した。
(5) 目先の必要性で動かされやすい学生に対して、「将来役に立つから」という言い方だけでは説得力に欠ける。
(6) オリエンテーションゼミナールの「補遺」的な印象を与えてしまった。
(7) 各学部のカリキュラムの一環として、1年次の早期に導入・実施すべきである。
(8) 正規授業時間に織り込めない場合は、入学直後のオリエンテーションで実施することも考慮する。
(9) 意識の低い学生も散見され、受講態度の改善方策の必要性を感じた。

以　上